

平成 24 年度 全国盲学校弁論大会岡山大会
最優秀賞（優勝）

「私と家族」

愛媛県立松山盲学校 保健医療科 2年富永 広幸(当時 49 歳)

昨年 4 月、私は松山盲学校に入学しました。それまではトラックの運転手。関東、北陸、九州、そして、中国、四国を鮮魚を積んで走り回っていました。トラックの中で寝起きをしながら 2、3 日家を空けることも少なくなく、一家の大黒柱として家族のため懸命に仕事をする。そんな生活に幸せを感じていました。

一昨年 10 月、私は会社のトラックをぶつけ、社長から目の検査を受けるよう命じられました。恐る恐る妻に話すと、「しょうがないじゃん。検査、行くよ」との一言。結果、網膜色素変性症とのことで、私は仕事を辞めることになりました。妻に連れられるまま盲学校を訪ね、落ち込む間もなく入学することになったのです。通学もできますが、私は家族と離れて寄宿舍に入ることにしました。これ以上、妻に迷惑を掛けたくないと思ったからです。

「自分のことは自分でやれ。一人になった時に困らんやろ」との妻の激励を受け、私の寄宿舍生活が始まりました。決まった時間にみんなで一緒に食事をしたり、掃除をしたり。これまでに経験のない集団生活です。私が何よりも苦手なのは、人付き合い。人見知りの激しい私が声を掛けたり、人前で話したりするのは、それはもう大変なことなのです。

運転手をしていた頃、仕事以外はほとんど話しませんでした。「黙ってないで、何か言え」と妻からよく言われたものです。やがて「ハズ虫」というあだ名を妻から頂戴しました。「ハズ虫」とは、大きな葉っぱに付く、触ると頭を振る毛虫です。「馬鹿にしゃがって」と頭にきました。なるほどと、納得もしました。なんせ、家のことはすべて妻任せ、何を聞かれても首を振るだけだったからです。それからというもの、妻は事あるごとに私を「ハズ虫」と呼びます。給料を持って帰ったときだけは優しくしてくれます。それも一瞬、すぐに「ハズ虫」と呼び捨てます。そんな妻ですが、このズバズバ言う遠慮のない言葉に、私はどれだけ救われたことでしょうか。そして、寄宿舍で過ごすうちに、この言葉の裏側にある優しさを、ありがたく感じるようになりました。

日曜日の夜から金曜日まで、寄宿舍で過ごします。これがなんと長くて寂しいことか。やっと帰れる金曜日、いそいそ帰り支度をしていると、決まって「もうすぐ着くよ」と電話が入ります。待ちに待った週末の始まりです。私の楽しみの一つは酒を飲むこと。家に帰って飲む一杯は最高にうまい。そして、孫に会うこと。上は男の子5年生、下は女の子3年生。女の子は日曜日の夜、必ず手紙を書いてくれます。「頑張れ、ジージ」。この手紙を寄宿舍で何度も読み返し、返事を書いて、週末孫に手渡すのが習慣になりました。そんな私に妻は「私はどうでもええんかい、あんたは孫さえおればええんやろ」と言い放つのです。

仕事をしていた頃、妻は私を大事にしてくれました。ところが、私が盲学校に通うようになるとどうでしょう。妻が「鬼」のように見えてきます。近ごろでは「また帰るん」とまで言われます。どうやら妻は私がない、孫との生活が楽でいいようです。特に私の食事の世話が面倒らしく、文句も言わずに黙って酒を飲んでいても、イライラして私に当たります。この変わりようは何だろうと家に帰るたびに思うのです。

でも、妻の苦勞は私が一番に分かっているつもりです。私が仕事を辞めてからというもの、妻が大黒柱になって頑張ってくれています。仕事、家事、孫の世話、その上、私の送り迎え、ゆっくり座っていることなどありません。「大事にする、苦勞はさせん」と言って結婚したのに、今では苦勞の掛けっぱなしです。「3年待てよ」と言い聞かせながら一日一日を指折り数え、やっと1年余りが過ぎました。

自分のため、家族のため、一生懸命に勉強して、少しでも早く一人前のマッサージ師になりたい。そして、妻や家族を守りたい。妻や家族、ちょっと口は悪くてもみんな大事な大事な宝物です。面と向かってはとても言えませんが、「ありがとう、みんながいるから頑張れる」といつも感謝しています。この思いを胸に、この家族に支えられながら、私はもう一度大黒柱になって、妻や家族を守ってみせます。